

リスクパネル:「リスク時代の企業経営」 「理論的視点から」

前日本リスク研究学会会長
滋賀大学 酒井泰弘

現代は「リスクと不確実性の時代」と言われる。だが、リスクの問題は、何も今に始まったわけではない。早い話、「地震、雷、火事、親父」、「火事と喧嘩は江戸の華」、「板っ子一枚、波の上」というような言葉が教えるように、日本人は昔から多様なリスクに直面しつつ、ものの見事に対処してきた国民である。

「リスク」とは何であろうか。通常定義によれば、それは人間の生活維持や社会経済活動にとって《望ましくない事象》の発生する不確実さの程度、および結果の大きさの程度を表す。だが、リスクはある意味でクスリでもあり、企業経営のように「リスクに挑戦する」ということが積極的意味を持つ場合が少なくない。そこで、最近の筆者はリスクについて次のように考えている。

「リスクとは、状態如何によって、ひとつの行為から複数個の結果が生まれることを指す。それは人間の生活維持や社会経済に対して、プラスとマイナスの両側面を持つ。リスクが大きいとは、複数の結果の間で変動の幅が大きく、また各結果の程度が大きいことを意味する」

「リスクの経済学」は古く新しい学問である。次の5つに時代区分するのが便利であると思う。

第1の時期は、有史以来1700年頃までに及ぶ未明期、「ヤミ」の時代である。「無常」とか「大航海」とか、リスクや不確実性に関係する事柄が多数発生したが、経済学自体がいまだ市民権を獲得していなかった時代のことである。

第2の時期は、1700年頃から1940年頃までに及ぶ始動期、「アベ」の時代である。旗手はアダム・スミスとダニエル・ベルヌーイの二人、それにマーシャル、ナイトやケインズなどの巨星が含まれている。期待効用基準は、すでに1736年、ベルヌーイによって展開されていたが、長らく無視される運命をたどった。

第3の時期は、1940年頃から1970年頃までの発展期、「ノモ」の時代である。この短い期間を象徴する業績は、数学者フォン・ノイマンと経済学者モルゲンシュテルンの共同著作『ゲーム理論と経済行動』(1944年)である。さらに、ナッシュ、ゼルテン、フリードマン、サベッジ、アレー、サイモン、トービン、マーコヴィツ、ステイグラールなどの巨匠

が並ぶ。

第4の時期は、1970年頃から2000年頃までの成熟期、「アス」の時代である。アロー、アカロフ、スペンス、スティグリッツなどが代表選手である。さらに、マルシャク、ラドナー、ハーヴィツ、ハーヴィツ、トベルスキー、カーネマン、ブラック、ショールズ、アーサーなど、多士済々である。

第5の時期は、2000年頃以降の再生期、「ミチ」の時代である。経済も経済学も閉塞状況にあり、両者の再生が必要な時期である。我々は21世紀の初頭、このまま未知が続くか、それとも新しい道が見つかるか、分岐点に立っている。

Ⅲ

リスクという概念は、単に量的な側面だけでなく、質的な側面からもアプローチする必要がある。当面のリスクが「得体の知れないリスク」なのか「既知のリスク」なのか、また「恐怖感を与えるリスク」なのか、「怖くないリスク」なのかどうか問われなければならない。そのためには、人間の喜怒哀楽などの心理・感情などの「ヒューマン・ファクター」の考慮がどうしても必要である。

「土魂商才」という言葉がある。これは、欧米人の商業観とは異なる考え方である。近江商人は土魂商才を体現した一群の集団として、江戸時代に全国的ネットワークを確立し、明治以降も商社やメーカー設立の主体となって、日本の近代化に大きな貢献をしてきた。

新世紀において、学際的なリスク研究がますます発展していくことが期待される。その際、リスクの一般理論の研究推進だけではいささか「つまらん」だろう。もっと「おもしろい」研究の一方向としては、リスクマネジメントの視点から近江商人論を再構築することだろうと思う。

リスク研究者はすべからず、リスク挑戦者でなければならない。夢やロマンを追う人間は、それだけで幸福者というべきであろう。